

ヤーシ・オスカーの1920年代初頭における地域再編構想 —「ドナウ文化同盟」(1921年)を手がかりに—

辻河典子

はじめに

本稿は世紀転換期ブダペストで社会改革派の知識人として活動したヤーシ・オスカー(1875-1957年)がウィーン亡命中の1921年12月に発表した「ドナウ文化同盟」構想を中心に、1920年代初頭の彼が唱えた旧ハンガリー王国の領域を中心とした地域再編論の特徴を考察する。

まず、ヤーシの経歴を簡単に整理したい。彼は1875年にナジカーロイ(現在のルーマニア領カレイ)¹でユダヤ系の家庭に生まれ、幼少期に家族全員がカルヴァン派に改宗した。1900年1月に雑誌『二〇世紀』を創刊、翌年には社会科学協会の設立に関わって書記長となる。同協会は当時のブダペストにおける進歩派知識人の代表的なサークルだった。

1905-06年の政治危機以降、ヤーシはフランス社会学や社会主義など様々な思想の影響を受けながら、「封建制」が残るハンガリー社会の近代化を求めて政治活動に傾倒する。この過程で彼は「(市民)急進主義[a polgári] radikalizmus」を掲げ²、1914年に全国市民急進党を結成した。同党は後のカーロイ政権に参画するが、実質はヤーシらによる知識人サークルだった。

彼は諸民族の領域自治に依拠しつつハプスブルク君主国を連邦に再編する「ドナウ合衆国」構想を提示し、1918年10月の共和主義的な「ヒナギク革命」で成立したカーロイ政権で少数民族担当大臣となる。国内の少数民族との交渉でハンガリーの歴史的領土内の少数民族の領域自治を認める「東のスイス」構想を示すが、諸民族の独立や協商国の介入、政権内の対立の中で試みは挫折して翌年1月に辞任する。

1919年3月21日のタナーチ革命で成立した共産主義政権に多くの知識人が協力する中、共産主義に否定的だったヤーシは5月にウィーンへ亡命した。8月初めのタナーチ政権崩壊後、ウィーンは「白色テロル」³を逃れて国外に亡命した知識人の拠点のひとつとなり、ヤーシはその代表的存在として革命理念の再現を目指した。

だがホルティ体制のハンガリーが国際的に承認される一方、亡命知識人たちの活動は限界を迎える。ヤーシは1925年にオーバーリン大学(オハイオ州)の政治学の教授としてアメリカ合衆国に渡る。その後の彼は第二次世界大戦期以外に積極的な政治活動を行わなかったが、国際政治情勢への批評など数多くの論考を発表した。

次に、主に歴史学分野におけるヤーシ研究の特徴を整理する。第一に、ハンガリーにおける彼の研究は、彼がユダヤ系かつ共産主義に批判的であったゆえに、両大戦間期から現在に至るまで同国の政治的文脈の影響を大きく受けてきた⁴。第二に、リトヴァーン・ジェルジによるヤーシの生涯全般に関する研究や、第二次世界大戦期の合衆国における反ファシズム活動に関する研究⁵を除けば、彼の亡命以降に関する研究は不

十分である。また、彼の置かれた状況や主張の背景となる政治状況が亡命前後で変化したにもかかわらず、在ハンガリー時代の主張の特徴が全て亡命後も一貫することを前提とした研究も多い⁶。第三に、英語圏では主にナショナリズム研究で参照され、一連の連邦国家構想も少数民族問題との関連で論じられる⁷一方、ハンガリーではより広範な社会改革を主張した人物として扱われる。実際、彼の社会改革案は「民主主義」を基礎に政治・経済・文化などが相互に関連しており、彼の少数民族問題論の分析にも複合的な視点が必要である。

日本では1980年代に彼の政治理論が紹介され、1918-19年革命史研究の中でその連邦国家構想が少数民族問題との関連で論じられた⁸。1990年代からは世紀転換期の知識人研究として桑名映子や三苦民雄の研究があるが⁹、共に政治活動が本格化する前の彼に注目している。また寺尾信昭は世紀転換期から革命期までのヤーシの社会改革論をユダヤ人論との関連で紹介した¹⁰。ヤーシと同時代の知識人との関連で言及される例もある¹¹。

1918-19年の二度の革命に関与した左派知識人は多くが国外に亡命したため、両大戦間期のハンガリーでは影響力が小さかった。本稿での「十月革命」はハンガリーで1918年10月30-31日に発生してカーロイ政権が成立した革命を指すが、この革命に関与した非共産党系左派亡命知識人の扱いは先行研究の中でも特に限られる¹²。この「十月主義októbrizmus」の定義づけには検討すべき余地も多いが、本稿ではヤーシの考える「十月革命の真の意義と論理」¹³に従い、「十月革命」が目指した共和制と土地改革を亡命後もハンガリーで実現させることを目指す政治方針を「十月主義」、それに携わる亡命知識人の総称を「十月主義者októbrista」とする。

ヤーシは君主国解体後の国民国家の分立とナショナリズムの対立に対して、その背後の社会矛盾も含めて解決を目指した。ウィーン時代の彼は、第一次世界大戦後のヨーロッパの国際秩序が完全には確立していない段階で、挫折した革命の理念を現状に沿う形で復活させるべく政治活動を続け、ナショナリズムにもとづく領土修正主義と国際主義に立つ共産主義を否定し、矛盾の平和的な克服を目指した。彼の主張を読み解くことで、大戦末期から第一次世界大戦直後にかけての国際秩序を連続的に理解することが可能となるであろう。

以上から、本稿ではヤーシが1921年12月に提唱した「ドナウ文化同盟」構想を中心に、ウィーン時代の彼の主張を第一次世界大戦後の旧ハンガリー王国地域の再編の問題を中心に考察する。第1章は彼の連邦国家構想を中心に亡命前の社会改革論を整理する。第2章は1920年までの亡命初期のヤーシの活動を概観する。その上で第3章は「ドナウ文化同盟」構想が国境を越えて大衆を啓蒙する知識人ネットワークとして彼の政治的独自性を主張する特徴を持ちながら、領土修正主義との類似性を持つがゆえに実効性が低かったことを明らかにする。

なお、本稿での「知識人」とは、高等教育を修了した文筆家や学者（公務員との兼業も多い¹⁴）の中でハンガリー社会の改革を目指した人々（ユダヤ系も多い）の集団を想定している¹⁵。

1. 「民主主義」・「封建制」・少数民族問題

1-1. 「アルキメデスの点」

1911年1月にガリレイ・サークル¹⁶で行った講演「少数民族問題とハンガリーの未来」で、ヤーシはハンガリーの少数民族問題が、ある意味で同国の民主主義の「アルキメデスの点」、すなわち究極の出発点だと述べた¹⁷。翌年には『民族国家の成立と少数民族問題』で君主国地域の少数民族問題を中心に論じ、少数民族問題の解決のために「人民の言語における十分な学校・経済・公論空間」と「全ての少数民族が言語・文化を自由に発展可能だという法律の公認」が不可欠であり、この法律の公認が「最低限の少数民族綱領」であると主張した¹⁸。同書によれば、「民主主義」的な少数民族政策はハンガリーにおいて社会の発展だけでなく、国家統一を保障する最重要な前提でもある¹⁹。また、彼はハンガリーの少数民族問題と「封建制」を関連させ、「封建制」を「民主主義」(特に土地改革)が打破すると考えた²⁰。

ところで、ハンガリーでは農奴解放が19世紀半ばに既に実施されている。農奴解放で没落した中小貴族はジェントリと呼ばれ、国家機構内で官僚化して大きな地位を占めた²¹。一方、農民は全人口の38%(700万人)を占めたが²²、多くの貧農がアメリカ大陸に移住し²³、労働拒否に対する身体的処罰が合法化されるなどで農業労働者は特に厳しい立場に置かれた。ヤーシは「封建制」という表現で大土地所有制度を基盤にした政治的・経済的関係性がハンガリーに残存することを指摘したのである。

1-2. 連邦国家構想

(1) 「ドナウ合衆国 A dunai egyesült államok」

第一次世界大戦末期にハプスブルク君主国内の諸民族の独立機運が高まる中、ヤーシは同地域の連邦国家への再編案を考えた。連邦国家の形成を通じて同地域の安定を図る案は、1912年の著書で「ヨーロッパ合衆国 az Európai Egyesült-Államok」²⁴構想として既に示されていた。なお、彼はロシアに対する防御を提案するナウマンの「中欧 Mitteleuropa」論に一時傾倒したが、やがて否定する。彼は後にナウマンの「中欧」は軍国主義的だが、自身は地理的・経済的条件から互いに強く結びついた諸民族の民主主義的・平和主義的な同盟を考えていたからだと述べた²⁵。

1918年春までにヤーシはウィルソンの「十四カ条」の理念にもとづいて君主国を諸民族の連邦国家へと再編する案を構想し、10月に出版された『君主国の未来：二重制の崩壊とドナウ合衆国』で5カ国²⁶から成る連邦国家への再編案を提示した。同書で彼は連邦国家の「民主主義」化によって以前は平和を不可能にしていた「封建制」の残滓が永久に破壊され²⁷、コッシュートの見解を継承してドイツとロシアの間に緩衝国を形成することで、この地域が安全で連邦化された基礎を持つであろう²⁸と主張し、ハンガリーの領域的一体性を保持しようとした²⁹。

(2) 「東のスイス A keleti Svájc」

1918年10月30-31日の革命により、ハンガリーではカーロイ・ミハーイの独立党、ガラミ・エルネーとクンフィ・ジグモンドらの社会民主党、ヤーシやセンデ・パールの

急進党を中心とするカーロイ政権が成立した。ヤーシは少数民族大臣として、ハンガリーの歴史的領土の枠組みを維持すべく、ハンガリーからの自立あるいは周辺国への併合を求める各民族指導者と交渉する。政権は親協商国の姿勢を示すことで戦後交渉を有利に進めようと試みたが、協商国は一貫してハンガリーを敗戦国と見なし、休戦交渉でもハンガリーの歴史的領土の一体性を否定した。

11月13-14日、ヤーシはアラドでトランシルヴァニアのルーマニアへの併合を要求するルーマニア人国民会議と交渉を行い、ルーマニア人が多数派を占める地域でのルーマニア人行政府の自治を認めるなど11の条件を示した³⁰。これが「東のスイス」構想と呼ばれる歴史的領土の枠組みを維持しつつ少数民族の文化的・行政の両面での自治を認めたハンガリー国家再編案である。だが国民会議はハンガリーからの独立を求め、交渉は決裂した。

北東部ザカルパチアの「ルテニア人」³¹と西部(後のブルゲンラント)のドイツ系住民との交渉は比較的順調に進み、「東のスイス」構想の理念を反映した自治法が定められたが、実効性は乏しかった。ヤーシは政権内での対立もあり、翌年1月に辞任する。

カーロイ政権は協商国の支持を欠き、国内の少数民族の独立傾向や周辺諸国の介入に対抗できなかった。土地改革の遅れは政権から農民を離反させ、11月に結成された共産党は急進化した労働者・農民の不満を吸収する形で成長した³²。

1919年3月20日に伝えられたパリ講和会議の最後通牒はハンガリーの歴史的領土の完全な解体を意味した。これを拒んだ政府はソヴィエト・ロシアの支援を期待し³³、21日に社会民主党と共産党が合同したハンガリー社会党がプロレタリア独裁を宣言する。新政府は「社会主義連邦」の構想を以てハンガリーの歴史的領土の解体を阻止しようとした³⁴。一方、ヤーシは共産主義を嫌って5月1日にウィーンへ亡命した。

2. 亡命初期の活動

2-1. 革命理念の再現に向けて

2-1-1. 「亡命者の綱領」

本節では、ヤーシが1919年5月の亡命から1920年にかけてカーロイを中心に亡命者の政治活動を展開させようとした試みを概観する。

亡命当初は政治活動を行っていなかった彼の転機は、7月半ばに当時偽名でオーストリアに逃れていたカーロイから、自身の辞任と共産主義者への権力委譲に関する手記を託され、そのドイツ語訳と社会民主党系の『労働者新聞』への掲載を手配したことがあった。当時のカーロイはイタリアへの逃亡に失敗し、プラハへの亡命を検討していた。

8月1日にタナーチ政権が崩壊したが、彼は事態の変化を待って帰国することにした³⁵。だが4日にはルーマニア軍がブダペストに入り、「白色テロ」も収束せず、ハンガリー国内の混乱は続いた。彼は6日に論説「ハンガリーの危機」を『労働者新聞』に発表して執筆活動を再開する³⁶。

当時の左派亡命知識人は、アメリカ合衆国で亡命者の政治方針を宣伝することが重要だと認識しており、ヤーシの日記や手紙にも関連の記述が散見される。10月初め

に彼はブラハでマサリクとベネシュに会い、合衆国行きの計画への理解と、カーロイのチェコスロヴァキアにおける保護を得る³⁷。この後1920年前半にかけて、ヤーシは英語の学習やポリシェヴィズムに関する講演内容の作成などの準備を進める。

11月3日に当時カーロイが逃れていた北ボヘミアのドゥビで、非共産主義系の左派亡命知識人が10項目の「亡命者の綱領」を作成した³⁸。内容はヤーシの主張と多くが類似するが、彼の盟友のセンデの他、社会民主党でタナーチ政権に関与したクンフィらも名を連ねた。

同綱領は冒頭で自分たち亡命者とその政治的主張のためにハンガリーを離れることを余儀なくされたことを認めながら、1918年10月の革命が成し遂げたことを守るために活動することを謳う。10項目は「亡命者の活動計画・方法・戦術に関して合意している」内容であり、背景とする思想潮流を超えて亡命者が一定の共同歩調を取ろうとしていたことが窺える。

彼らは「社会において全ての抑圧・虐待・搾取・不労所得を終わらせようとする意味で社会主義者である」と自己規定し、その目的のために「テロルと独裁によって」ではなく「民主主義と文化と経済・政治組織の進展によって努力する」と定める。同盟の相手は「社会の全ての階層」すなわち「生産的な精神あるいは身体の労働を行う者たち」として「精神と工業労働者」・「農業労働者」・「小農業者」を挙げた。

外交政策では、反革命の試みに対抗して「全ての民族の反資本主義的・反封建的・反軍事的階層」との同盟を目指し、「ヴェルサイユ条約の不正」を、失地回復主義や新たな戦争によってではなく、真に民主主義的で平和主義的な人民同盟の建設によって改めることを主張した。

また、他国家からの財政協力は後に作られるであろう中央組織に貢献する場合のみ、個人からは「主張の一貫性」と「性格の正直さ」から責任を取ることができる場合のみ受けることができるとした。

そして「全ての粗野なデマゴギーから距離を取り、我々の試みの全てに対して、学問と良い判断力による批判を適用する」と述べ、「全ての人間の良心の自由と宗教の信仰を、敬意を持ちながら維持する」とした。亡命者同士は中央組織の形成まで相互の活動について連絡を取り続けることを定め、新たな仲間は以前から関わっている者全員の同意がある時のみ加わることができるとする。ブダペストでも協力者の指揮下で組織を立ち上げ、亡命者とハンガリー国内の進歩派との間を繋ぐ存在として位置づけることを目指した。

11月16日にホルティ率いる国民軍がブダペストに入る。タナーチ革命崩壊後のハンガリーは、ブダペストのフリードリヒ内閣、ルーマニア軍、セゲドを中心とした反革命政権の三勢力が分立し³⁹、国民軍は反革命政権の中核を成していた。講和会議が事態の収束とルーマニア軍の撤退、協商国との交渉をする権威を持ったハンガリー政府の形成を目指した結果、ルーマニア軍の撤退の代わりに国民軍に更なる権威を与えて展開させることとなったのである。11月24日にキリスト教社会主義のフサーク・カーロイによる保守派主導の政府が形成されたが、カーロイ派や旧急進党は招かれなかった⁴⁰。

1920年1月末から2月初めにかけて議会選挙が実施され、小農業者党が農村部で、キリスト教国民統一党が都市部で支持を集めた。社会民主党は右翼急進派からの選挙

活動への妨害に対して選挙をボイコットし、都市を拠点とした他の左派勢力は大幅に後退した。選挙後の議会は3月1日にホルティを摂政に選出する。

2-1-2. 亡命者の政治活動とチェコスロヴァキア政府

1920年3月末、ベネシュの私邸に招かれたカーロイ、ヤーシ、センデは、亡命者の活動方針についてベネシュと意見を交わした⁴¹。カーロイは亡命者の組織化の必要性を主張し、同盟の基礎におそらく共産主義者の関与も伴うと述べた。亡命者の共通の行動計画として、カーロイはホルティ派の駆逐、民主的な共和国の再建、土地問題の解決、広範な社会政策を挙げた。外交政策では失地回復主義と戦い、新しい諸国家との平和で徹底的な関係、忠実な人民同盟への試みを挙げる。そして、カーロイが所有する絵画の売却費用を亡命者の資金に充てることができるとした。

ベネシュはマジャル人亡命者には大きな重要性があると述べ、プラハでのドイツ語新聞の発行と、それによって将来発行されるであろうフランス語新聞の執筆への参加を勧めた。彼は外国の関心を亡命者らの考えや手法に向けることに尽力するように勧め、その立場は西欧でもイタリアでもなく継承国と真に忠実な関係を可能とすることが最も重要な側面であり、イギリスはすぐに亡命者のことを理解するだろうと述べた。

この会合で、ベネシュは3人からの問いに答える形で亡命者の活動に対するチェコスロヴァキアの姿勢を説明した。共産主義者との関係について、彼は共産主義者の関与は現在のところ望ましくないだろうと述べ、早晩ポリシェヴィキが失脚してイギリスが労働者政権を掌握するので、クンとその一派の重要性はますます小さくなるという見解を示した⁴²。講和条約の改正に関しても、亡命者が計画を達成するのであれば適当な宣言を出す用意があり、民主主義の要素の間での名誉ある忠実で率直な関係の創出が主であると答えた。また、亡命者と半公式に会合を持ち、そのやり取りを公表する用意もあると述べた。更に、センデとヤーシのウィーンでの地位が覆された場合は保護を提供し、亡命者の活動の資金源とした絵画の売却でも移送に協力する用意があることも述べ、カーロイら亡命者への支援を示唆した。ヤーシによれば、民主的な継承国の間で封建的な島であるハンガリーは今日の体制を維持できないとベネシュは考えており、ヤーシらの方向性を新たなヨーロッパの勢力均衡を創り出すことができるかもしれない唯一のものを見なしていたという。

ここから、1920年春までに、プラハとカーロイを中心にヤーシら亡命者の政治活動が形成されつつあったことが分かる。

2-1-3. 活動方針の多様性

だが、亡命者の活動方針は完全には一致していなかった。4月15日付のヤーシの日記では、パウアーと『労働者新聞』の編集長アウステルリッツが、クンフィは亡命者でもカーロイとではなく同じ社会主義者のガラミと行動することを助言したこと、カーロイが社会主義者政党に入らないのであれば自身が新しい「労働者政党」を作るとベーム・ヴィルモシュが主張していることへの反発が記されている⁴³。また、カーロイはポリシェヴィキへの傾倒を強めており、ヤーシはその誤りを手紙で指摘している⁴⁴。共産主義をめぐる2人の見解の相違は、ヤーシがオーバーリンに移ってから続いた。

6月7日にヤーシとプラハで意見交換をしたマサリクは、ヨーロッパの方がヤーシの活動には適切だとして、彼のプラハ滞在と雇用の考えを提案したが、ヤーシは自身の将来の政治的自由を禁じるものだと断っている⁴⁵。

7月3日の亡命知識人による会合では、ハンガリーの領域的統一と継承国との政治協力の点が問題となり、失敗に終わる。既に6月4日にトリアノン条約が調印され、ハンガリーの世論に逆らうことを望まない者がいたため、フランス人作家でポリシェヴィキとも深い関係にあったアンリ・バルビュスら『光(クラルテ)』派との関係を築き、『ウィーン・ハンガリー新聞』を掌握することが決められたのみだった⁴⁶。

ヤーシは10月末に「十月革命」の記念日に合わせて、革命の回顧録『ハンガリーのゴルゴタの丘、ハンガリーの復活』を出版する。11月にはユーゴスラヴィアとルーマニアで政府要人・知識人に積極的に会い、ブカレストでは合衆国への査証を取得する⁴⁷。

ユーゴスラヴィアとハンガリーの間では、第一次世界大戦後にセルビア軍が占領したペーチとその周辺処理が懸案であった。タナーチ革命崩壊後に革命に関与した社会主義者や労働者らがこの地域に逃れ、ベオグラードではリンデル・ベーラらが同地域を足がかりに革命の継続を目指していた。既にヤーシは同地域の問題を亡命者がハンガリーを奪還する出発点だと重視していたが⁴⁸、リンデルはクンフィと共に活動するつもりはなく⁴⁹、社会主義者の運動に深刻な道徳的・精神的欠如を見ており⁵⁰、亡命者間での活動方針の違いがここでも存在した。

12月上旬にウィーンに戻ったヤーシは15日・17日・19日付『ウィーン・ハンガリー新聞』に相次いで論説を発表した⁵¹。15日の論説は「我々のヨーロッパ全体の未来は農民・労働者の大衆が中東欧において中世的な大土地所有制度を完全に排除できるのかに今日かかっている」⁵²と述べ、ルーマニアでの土地改革への取り組みを紹介し、ユーゴスラヴィアやルーマニアで伸張する農民運動との連携を主張する。17・19日の論説ではトランシルヴァニアのマジャル系住民を扱い、彼らの地位向上のために、まず彼らに新しい精神の方向性の採用を求めて「報復ではなく、大きな民族の悲劇によって打たれたマジャル人はヨーロッパの人民同盟の真の建設と組織の形成を主張しなければならない」⁵³と述べ、次いで彼らのルーマニアに対する「考え無しで有害な政策による消極的な抵抗」⁵⁴を止めて新たな国家の枠組みの中で位置づけなければならないとした。そしてルーマニアの中での彼らの民主的な自治の実現を主張する。自治に関してはルーマニア政府の配慮も求めた⁵⁵。

以上、亡命初期のヤーシの活動を概観したが、ウィーンを拠点とした亡命知識人の間では活動方針をめぐる意見の相違が当初から存在しており、ヤーシはその各派と関わりながらカーロイを軸に亡命者を結集させ、1918年10月の革命の理念を現状に合う形で再現することを目指したことが分かる。

2-2. 『ウィーン・ハンガリー新聞』

ヤーシは亡命知識人の活動拠点として『ウィーン・ハンガリー新聞』を重視した。同紙は1919年10月31日から1923年12月16日までウィーンを拠点に発行された日刊紙だが、実態に不明な点も多い⁵⁶。同紙は創刊当初はホルティ寄りだったが、1920年2月13日にラーザール・イエネーが編集長になって左傾化したとされる⁵⁷。1920年に入る

と思想的には共産主義に近いガーボル・アンドルが中心的存在となる。一方、社会民主主義者で戦前には機関誌『人民の声』に携わっていたゲンデル・フェレンツが当時ウィーンで発行していた週刊紙『人間』が、7月に『ウィーン・ハンガリー新聞』にホルティ派からの手が及んでいることを指摘しており、その複雑な立場が窺える⁵⁸。

同紙は第一次世界大戦後に継承国の領土となった地域のマジャル系住民も対象だったが、1920年のスロヴァキアでの発禁処分は大きな問題となった。ヤーシは同年12月上旬にウィーンに戻った際にこれを知り⁵⁹、カーロイに伝えている⁶⁰。その手紙によれば、処分理由は同紙が「ホルティ・共産主義者の印刷物Horthy-kommunista sajtótermék」であるためだという⁶¹。ヤーシはガラミとポリシェヴィキとは無関係だと考えていたが、ガラミの仲間はボジョニ(ブラチスラヴァ)で発禁処分を招くような活動を数ヶ月来行っていたと記す。当時、ガラミが独自の新聞『未来』の創刊を目指すなど、亡命者の活動方針の違いが様々に表出していた。また、ガーボルらが共産主義者と交流を持ったことに不快感を示し、同紙を救うためにあらゆることを行っていると記す。

2.3. 「マジャル人亡命者の課題」

2.3-1. 情勢の変化

1921年に入るとヤーシらを取り巻く情勢が厳しくなる。しかもハンガリーでは彼が「封建制」との関連で批判した伝統的政治勢力が政府・議会を担う体制が確立しつつあった。

同年2月、ヤーシは合衆国への渡航準備を進めていた。3月にナポリから出航予定であったが、その直前にフィレンツェで起きた共産主義者が関わった騒擾の中にホルティ派の者がいたことが問題とされ、ローマに滞在中だったカーロイとその家族がイタリアから追われてオーストリアのヴィラッハに勾留された。加えて3月14日にはベネシュとハンガリー首相テレキ・パール、外相グラツ・グスタフが会談を行う。更に3月下旬には前国王カーロイ4世(オーストリアではカール1世)が帰国してホルティに王位を要求した。これは旧王国領の復活、すなわちハンガリーの領土修正に繋がるため、周辺国・協商国が反発し、前国王は国外に去る。ヤーシはこの状況下でカーロイの安全の保障に努め、4月上旬にカーロイ一家はダルマチアへ向かった⁶²。

10月下旬、トリアノン条約で定められた西部(現在のブルゲンラント)のオーストリアへの引き渡しをめぐってプローナイら右翼急進派が同地域の独立を宣言するに至ると、前国王はこれに乗じて再度帰国し、彼らを率いてブダペストへ進軍しようとした。この軍事行動は失敗するが、チェコスロヴァキア・ルーマニア・ユーゴスラヴィアが軍の出動も辞さない強硬な態度を示したことにヤーシは衝撃を受けた。

前国王夫妻の引き渡し終了後の10月28日にヤーシとセンデはブラハでベネシュらと会談し⁶³、ブルゲンラントでのトリアノン条約の履行を約束する他、民主主義的なハンガリー政府の実現のために軍の動員を解除すること、少数民族の保護に関しては文官による協定で新たな民主主義的政府を設けること、このようにして成立した新政府の立場が保障されることを提案した。ベネシュらはこれらに理解は示したが、ハンガリーへの軍事的圧力の有効性を主張した。ヤーシはこのブラハ滞在中で継承国の「反動」⁶⁴がハンガリーよりも強力だと痛感してジレンマに陥ったと日記に残した。

2-3-2. 政治活動の強化

情勢がヤーシらに不利に動く中、彼は政治活動を強化した。1921年6月15日の『ウィーン・ハンガリー新聞』の編集会議を経て彼は同紙の運営も担い⁶⁵、編集方針も変更された⁶⁶。編集部は以前の体制が引き継がれたが、それまで同紙の中心的存在だったガーボルは8月に編集部を去る。

ヤーシは6月の会議後にカーロイに手紙⁶⁷を送り、カーロイの下で『ウィーン・ハンガリー新聞』の「精神的独裁 a szellemi diktatúra」の採用、すなわち亡命知識人が主導して社会主義の精神⁶⁸にもとづいてハンガリー国境外のマジダル系住民に適切な影響を与える左翼組織へと成長することを期待する旨を記した。

この活動方針は、直後の6月19日付の論考「マジダル人亡命者の課題」⁶⁹からも読み取れる。彼は土地改革と共和制という十月革命の理念の継承、ハンガリーの政治・経済の「民主主義」化、新たな道徳の構築の必要性を訴え、継承国とハンガリーの「民主主義」的な世論をつなぐこと、国境外のマジダル系住民が領土修正主義に陥らないように、彼らを「民主主義」的に発展させ、文化・文学の試みを助けることの2点を「亡命者の課題」と位置づけた。また、彼はこの改革を経てハンガリーが「経済的・政治的に民主主義化された」⁷⁰ことよってのみヨーロッパの中で居場所を得られると説く。この「ヨーロッパ」は特に西欧を意識した先進的な地域という意味合いを含むと推定される。

亡命者の役割をより具体化させたのが、6月26日付の論考「亡命者の祖国への『背信』」⁷¹である。彼はハンガリー国境外のマジダル系住民の問題を重視し、ハンガリーが継承国と徹底のかつ豊かな経済的・文化的関係を構築すること、分断されたマジダル人に対して、障害なく言語・文学・科学・芸術を育成・発展できるような強力な文化面での自治を保障すること、国境外に住むマジダル系住民を「意識的・継続的・生産的活動」へと組織化させることの3点に最終的な目標を定めた⁷²。この主張は2-2.で述べた1920年12月の論説とも重なる。

以上2つの論考より、ヤーシが土地改革を通じたハンガリーの政治・経済の「民主主義」化とハンガリーの領土修正要求による周辺国との対立関係の解決を反革命体制打倒の意義だと考えて国境外のマジダル系住民の役割を重視する一方、自分たち亡命知識人をこれらが実行されるための中核勢力に位置づけていたことが分かる。「ドナウ文化同盟」構想は彼のこうした新たな地域的枠組みの模索から生まれた。

3. 「ドナウ文化同盟」

3-1. 概要

1921年12月25日、ヤーシは『ウィーン・ハンガリー新聞』に「ドナウ同盟の未来」⁷³と題した論考を発表した。以下はその概要である。

「ドナウ盆地⁷⁴の人民たち a dunai medence népei」の間で「ある種の不安、抑圧、不確定、絶望に近い感情」が存在し、「激しいインフレや拡大する失業、生活水準の急激な悪化、かつての中間階級の崩壊、生産活動をしない資本家の介入の結果」に加え、「普遍的な精神の基礎」も危機にある⁷⁵。この「精神の危機」はヨーロッパ、否、世界で

見られる現象だが、ドナウの人民たちには特にそれが重くのしかかっている。第一次世界大戦で西欧にもたらされた危機が「中欧 közép-európa」で継続しており、ドナウ盆地にその原因と害悪が存在する⁷⁶。

同地域に戦後成立した新秩序は、国民と国家の自由を指向する一方、それまで存在していた経済・流通・交通・文化の自然な統一を各国の関税規則・軍事・政治が遮断することで失われ、各国の経済システムは互いに貧弱で閉鎖的である。したがって、ドナウの人民たちの大きな問題は、彼らの国家・国民が、その完全な独立と「ドナウ運命共同体」の全般的な経済・文化の利益とを調和させながら存在することであると彼は主張するが、同時に「新しい諸国家が経済と文化の連帯の問題の方向を向いていない」と批判した。そして、「ドナウ同盟」の構想には、ドナウの人民たちが「最良の知性」を「ある新しいイデオロギーや道徳の雰囲気」の中で統一することに成功しない限り絶望的だと訴える⁷⁷。

そこで「ドナウ人民の文化同盟」が提唱される。この同盟における「文化」は「全体の構想の主題を創り出す」ものである。文化同盟の構成員は「政党や階級で結集することを止め、真に民主的で文化を愛し、諸国民の自由に対して相互に敬意を払い合う全ての人」で、マジャル、ドイツ、チェコスロヴァキア、南スラヴ、ルーマニア、ウクライナの人民である⁷⁸。

文化同盟の構成員は、自分たちの所属組織（新聞・大学・労働組合など）においてこの同盟の構想の下、その理念を宣伝することと、ドナウの人民に悪影響を広めようとする全ての企みの拒絶を義務とする。同盟は、「資本家や軍人」によって歪められた形式ではなく、「世論に向けて個々の国民の経済・文化・社会の問題の真の解明に達するために」出版・翻訳・定期的な集会を通じたデモンストレーションを通じて啓蒙的な活動を行い、それらを通じて「あらゆる種類のショーヴィニスト・ナショナリスト・帝国主義者の抑圧的な傾向」との戦いを精力的に取り上げ、「労働と文化の利益が、あらゆる国家において連帯していること」を証明する⁷⁹。

「無分別な大衆 öntudatlan[sic.] tömegek」はこの活動によって「ドナウの人民が相争うこと」は「軍人」・「資本家」・「政治家」にしか寄与しないこと、「全ての熱心に働く者の利益」が「平和」、すなわち「思想・富を可能な限り徹底的に、かつ阻害されずに交換すること」であることに気づく。こうした風潮では、国境外のマジャル系住民が「各国民の生産的相互関係の価値をつなぐ架け橋」となる。「諸言語の差異」は「文化の多彩さ」であり、「負担」でも「障害」でもなく、逆に「長所であり発展を促進するもの」である。こうして「現状の政治的・経済的問題が決して解決しなくとも」、「ドナウ文化同盟は新しいドナウの統合要素となるだろう」⁸⁰。

彼は、こうした考え方がなければ「ドナウの人民による年の浅い独立は直ちに民族統一主義の熱狂的な動乱と外国の帝国主義の分割命令による干渉の間で死んでしまうだろう」と述べ、最後に「真に新たな行為が生じうるには、自由な人々による自由な関係が必要」であり、「この精神からのみ、新たなドナウの秩序が生じうる」と主張した⁸¹。

3.2. 文化同盟の特徴

結果的にこの「ドナウ文化同盟」構想は実質的な影響力を持たなかったが、当時の

ヤーシの政治論を考える上で重要な特徴が見られる。

(1) 大衆を主導する形での社会再編

ヤーシは中欧諸国の緊張関係を踏まえ、政治レベルでの解決よりも、同地域の知識人が国民国家の枠を超えた文化的連帯の創出を試み、大衆への啓蒙を目指した。彼は、軍人・資本家・公務員を自身の特権・利益を追求する集団(すなわち「封建制」と結びついた集団)、人民を正しく導かれれば社会改革の原動力となる集団として明確に対立させ、後者が文化同盟の活動によって現状を認識することで、自ずと諸問題が解決されると考えていた。そして、文化同盟の活動をハンガリーと周辺国双方のナショナリズムに対置させた。

ここから、ヤーシが自分たち亡命知識人を人民の先導者として「民主主義」的な地域再編を進める存在として位置づけていたことが亡命後も一貫していたと考えられる。

(2) 政治的独自性の主張

ヤーシら亡命者を取り巻く情勢が不利に動く中、彼はハンガリー国内のみならず中欧全体の緊張緩和と安定の回復のために彼独自の案を提示しようとした。中欧の統一の安定と諸民族間の友好関係とは、世紀転換期から彼が一貫して取り組んできた課題である。ハンガリーにおける前国王の帰国問題や失地回復運動、これに呼応した周辺諸国との緊張を前に、この課題への対処は急務だった。

その中で、ヤーシは第一次世界大戦後の政治的枠組みを容認した。これは第一次世界大戦後のハンガリーの国境線を法的に確定させたトリアノン条約の承認に等しい。同時期のハンガリー政府は条約修正を国際社会に認めさせるための第一段階として内政の安定化を図っており、彼の姿勢は非常に特徴的である。

その結果、彼は連邦国家の枠内で領域自治を行う型のそれまでの国家・社会再編案を後退させたが、ハンガリーの政治・経済・社会問題の解決に向けた「民主主義」の導入という世紀転換期以来の主張は継続していた。

(3) 領土修正主義との類似性

両大戦間期の同地域は、マジダル人居住地域が各国家の国境線で分断されていたが、同構想は現状の国境線の改定を求めなかったため、ハンガリー国境外のマジダル系住民からの反発が必至だった⁸²。一方で、彼が同構想で対象とした領域は実質的にはハンガリーの歴史的領土であり、マジダル人である自分たち亡命知識人が大衆を啓蒙する形で中欧地域全体としての経済的・文化的利益を目指した。しかも彼は既に国境外のマジダル系住民を統合の要と位置づける論考を発表しており、ハンガリーの領土修正主義を周辺国に想起させる可能性が高かった。ゆえに「ドナウ文化同盟」構想は、国境外に住むマジダル系住民からも周辺諸国からも支持を得られなかった。そしてヤーシらを取り巻く国際情勢も悪化し、最終的に反政府ネットワークの形成の試みは挫折する。

3.3. 「文化」と「民主主義」

「ドナウ同盟の未来」でヤーシが定義した「文化kultura」とは「全体的な構想の中心となる思想を創り出す」⁸³ものであることから、民族の差を超えた何らかの概念を共有すると考えられる。また、文化同盟の構成員の定義にある「国民nemzet」とは各国民国家を形成する政治的主体の意であると考えられる。「人民nép」は「国民」よりも階級や身分を超えた広く一般の人々を指すと考えられるが、ヤーシは文化同盟が「労働と文化の利益があらゆる国家において連帯していることを証明する」⁸⁴と述べており、主に労働者の同盟組織として想定したと考えられる。一方、彼はマジャル、ドイツ、チェコスロヴァキア、南スラヴ、ルーマニア、ウクライナの「人民」を念頭に置いていた。ゆえに、彼の考える「文化」とは民族ごとの個性性と、それを超えた共通性の両方を併せ持つと考えられる。

先述した1911年の講演で、ヤーシは「国民性」を通じてのみ「国際性」に達し、それによって「人間性」が創られると主張していた⁸⁵。1910年代初頭当時、彼は少数民族政策がハンガリー国家の統一を維持すると同時に、経済的・文化的利点のため、通常は少数民族（マジャル人以外のエスニック集団を指すと考えられる）の間で主要民族の言語を学ぼうとする意欲がもたらされると考えていた⁸⁶。同講演で彼が指した「国民性」とは、言語を初めとした文化的同化によって将来的に成立しうる政治的共同体の担い手の特性を指すと考えられる。

ところで、彼は男女普通選挙権を基盤とした議会制民主主義を志向しており⁸⁷、この担い手はいわゆる近代市民社会における「市民」を指すと考えられる。ゆえに、「国民性」が「国際性」に通じるとは、民族の差を超えて「市民」として各政治的主体が共有するものがあるという意味である。彼は亡命前からハンガリーの少数民族問題と「封建制」を関連させ、「封建制」を民主主義が打破すると考えており⁸⁸、彼の言う「民主主義」化とは土地改革による大土地所有制の打破や、各民族文化の保障・発展の促進など、いわゆる近代化を指すと考えられる。この「民主主義」が民族の差異を超えた共通概念である。

更に、先の講演での「人間性」からも明らかのように、彼は「民主主義」と関連して人間の理性的な側面を重視した。亡命後も「民主主義」によって打破されるべき大土地所有制度がハンガリーで道徳的向上の障害となっていると批判している⁸⁹。1924年にも当時のヨーロッパでの「民主主義」を悲観視する一方で理性への信頼を示した⁹⁰。

以上から、文化同盟で彼が定義した「文化」とは、各民族の個性性である具体的な言語等に限らず、民族の差異を超えた共通性としての「民主主義」、更に言えば人間の理性的な側面に注目し、いわば近代市民社会を形作る「普遍的権利」の領域まで念頭に置いていたと指摘できる。この見解は亡命前後で共通する。

3.4. 構想の挫折

先述の通り、「ドナウ文化同盟」構想は実質的な影響力を持たなかった。1922年3月18日にチェコスロヴァキアの外交官クロフタは、亡命者がハンガリーに帰国すればホルティのように領土修正主義的な外交政策を行使するだろうというベネシュの談話を伝えた⁹¹。ヤーシはクロフタに対し、我々の外交政策がホルティとは全く異なるとべ

ネシュを納得させられなければ亡命者の立場は全く希望を失うと伝えた⁹²。更に同年9月の国際連盟への加入承認などでホルティ体制下のハンガリーは国際社会への復帰を進めていた。

1923年1月初め、カーロイの滞在先マリボルで『ウィーン・ハンガリー新聞』の経営再建策が検討された。3月には資金調達のためにヤーシがミラン・ホジャの勧めでベネシュから支援を受けたという⁹³。これは同紙の独立性にも関わり、本件が彼の合衆国への移住を最後に後押ししたという指摘もある⁹⁴。同じ頃彼はホルティの摂政就任3周年に際し、体制の存続の背景にはハンガリーでの「大衆の精神 tömeglélekの無学さ、無秩序さ、シニズム」があり、政治だけでは不十分で、新しい精神と道徳が必要だと主張した⁹⁵。

5月に彼は合衆国渡航用の査証を取得するためにブカレストに向かう。ルーマニア政府要人とも積極的に会うが⁹⁶、自らへの支持は拡大できなかった。復路で訪れたトランシルヴァニアでは、ヤーシはマジダル・ルーマニア双方のナショナリズムの伸張に直面する⁹⁷。失意のうちにウィーンに戻り、7月に合衆国での講演旅行に出発した⁹⁸。そして12月に彼は滞在先のニューヨークで『ウィーン・ハンガリー新聞』の廃刊を知る⁹⁹。これは彼ら「十月主義者」のウィーンでの政治活動の実質的限界を意味した。

こうして失敗に終わった「ドナウ文化同盟」構想だったが、「十月主義者」の政治活動が国際的に次第に孤立する状況の中で、共産主義でもなければ領土修正主義でもない政治的独自性を持つ戦後構想の提示を試みた点は大きな特徴である。その基礎理念はハンガリー時代同様に「民主主義」である。そして第一次世界大戦後のヨーロッパにおける「民主主義」の危機を意識し、ハンガリーの問題を敷衍して新たな普遍的価値基準を創ろうとした。しかし、ホルティ体制下のハンガリーの国際社会への復帰により、ヤーシの戦後構想は挫折する。合衆国に移ってからの彼は第二次世界大戦期以外、政治活動からは大きく後退するため、ウィーンでの政治活動の挫折が大きな転換点となった。

おわりに

ヤーシは「ドナウ同盟の未来」の記事で、ドナウ盆地が西欧の危機の最前線にあると述べたように、ハンガリー政治を「民主主義」(彼にとっては西欧の価値観の象徴で、ハンガリーなど中欧の近代化には不可欠であった)という観点から第一次世界大戦後のヨーロッパの矛盾の象徴として把握する傾向にあった。

先述の通り、ヤーシは「ドナウ文化同盟」構想を通じて当時のハンガリー政府とは異なる政治的独自性を示そうとした。実際、彼の数々の論考は周辺諸国とイギリス・フランスなど戦後体制の形成で中心的な役割を果たした旧協商国の論壇を意識した側面も強い。例えば1922年10月29日付『ウィーン・ハンガリー新聞』で革命記念日に寄せて¹⁰⁰、彼は自分たちがハンガリーの問題をあらゆる関係においてヨーロッパの問題と感じられると主張して、「十月革命」の理念の普遍性を示そうとした。彼が「十月革命」の理念の普遍性を強調した背景には、西欧やアメリカ合衆国を意識した自身の対外的な政治アピール(ホルティ体制へのネガティブ・キャンペーンも伴う)の意図があったと考えられる。

同時に、彼の活動の視野が亡命前の旧ハプスブルク君主国地域のみから、ヨーロッパ全体に拡大したとも言える。当時の国際政治情勢、特に共産主義とファシズムに関する論評において、彼はヨーロッパの政治におけるボリシェヴィズムとファシズムという反民主主義的な政治姿勢¹⁰¹の拡大と、これらが影響力を強めた原因として、大衆の「民主主義」に対する幻滅を指摘している¹⁰²。ヤーシはこのような風潮を「ヨーロッパの民主主義の危機」¹⁰³と見なした。彼にとって近代市民社会は「民主主義」と不可分であり、ハンガリーや中欧が後進性から脱却するための手本だった。ゆえに彼は「民主主義」の復興を模索する。

第一次世界大戦後の国際秩序が未確立の段階で、ヤーシは旧ハンガリー王国領を中心に戦後処理の問題を指摘する一方、同地域を広くヨーロッパ全体を視野に入れて戦後の矛盾の最前線とも位置づけた。その中で、彼の政治姿勢に関する表現も亡命前の「急進主義」から「十月主義」へと転換していく。この過程については今後更に考察を深めたい。

1 本稿での地名は原則マジャル語表記を用い、必要に応じて他言語による呼称を併記する。「ブダペスト」「トランシルヴァニア」などの慣用表記はそれに従う。正書法は当時の表記に従う。

2 彼の定義する「急進主義」は「『急進的な諸改革』を誓うこと」であり、「勤労中産階級による物質的・精神的・倫理的により高次な生産を志向した運動であり、全生産力を発展・組織化・不労所得排除へと向ける努力を政治的に支えることを強く希望する運動」であった。その担い手は「専門的な精神労働者」あるいは「勤労知識人」である。Cf. Jászi, Oszkár, “Mi a radikalizmus? (急進主義とは何か?)” Budapest, Országos Polgári Radikális Párt, 1918, 5-6, 17-18.

彼は1918年に“a polgári radikalizmus”に関して“polgárság (市民性)”とは“bourgeois”ではなく“citoyen”と理解していると著しており、本稿でもこれに従って“polgár”は「市民」と訳す。Cf. Jászi, Oszkár, „Proletárdiktatúra (プロレタリア独裁),” Gyurgyák, János, and Kövér, Szilárd ed., *A kommunizmus kilátástalansága és a szocializmus reformációja: Válogatás politikaelméleti írásaiból* (『共産主義の絶望と社会主義の改革：政治理論の著作からの選集』), (Szerk. Gyurgyák, János, és Kövér, Szilárd, Budapest, Héttorony Könyvkiadó, 1989), 9.

3 在地の大地所有者に支援された準軍事組織によるタナーチ革命への参加者やユダヤ人への暴力行為。犠牲者には革命への参加に限らず多くのユダヤ人が含まれ、その数は1000人超とされるが、正確な統計値は不明である。Cf. Romsics, Ignác, *Hungary in the Twentieth Century*, Budapest, Corvina Books Ltd., 1999, 110, f.38.

4 1970年代半ばまでの過程はCongdon, Lee, “History and Politics in Hungary: the Rehabilitation of Oszkár Jászi,” *East European Quarterly*, vol. IX, No.3, 1975, 315-329に詳しい。

5 例えばN. F. Dreisziger, “Oscar Jaszi: Activities and Writings during World War II,” in Nándor F. Dreisziger eds. and introduced *Hungary in the age of total war (1938-1948)*, Boulder, Columbia UP, 1998, 267-286.

6 例えばHanák, Peter, *Jászi Oszkár dunai patriotizmusa* (『ヤーシ・オスカーのドナウ愛国主義』), Budapest, Magvető, 1985; Hauszmann, Janos, *Bürgerlicher Radikalismus und demokratisches Denken im Ungarn des 20. Jahrhunderts : der Jászi-Kreis um „Huszadik Század” (1900-1949)*, Frankfurt am Main, Lang, 1988.

7 例えばVárady, Tibor, “On the Chances of Ethnocultural Justice in East Central Europe,” in *Can Liberal Pluralism be Exported? Western Political Theory and Ethnic Relations in Eastern Europe* (Kymlicka, Will and Opalski, Magda (ed.), New York, Oxford UP, 2001), 137.

8 羽場久混子「ハンガリー近代における知識人と『民族』——ヤーシ・オスカーの中欧連邦構想——」、同編『叢書東欧4 ロシア革命と東欧』所収、彩流社、1990年、113-138；同『ハンガリー革命史研究 東欧におけるナショナリズムと社会主義』、勁草書房、1989年。

- 9 Kuwana, Eiko, “Intellectuals, Social Science, and Politics in Turn-of-the-Century Budapest: The *Huszadik Század* Circle (1900-1907)” (PhD diss. University of California at Berkeley, 2002): 三苦民雄「デュルケーム=ショック——ハンガリー社会思想とフランス社会学——」、『明治大学大学院紀要 法学篇』、第28集、1991年、381-398。
- 10 寺尾信昭「ハンガリー近現代史とユダヤ人——ヤーシ・オスカールにみるジェントリー=ユダヤ同盟——」、『西洋史学』174号、1994年、54-65; 同「ハンガリーにおける国家概念の再編と『東方ユダヤ人』」、「ロシア・東欧研究」6号、2002年、124-126など。
- 11 例えば、秋元律郎「古きハンガリーの友との別離——亡命地におけるK・マンハイムとO・ヤーシ——」、『社会学年誌』30号、1989年、1-27; 三苦民雄「ピクレルの社会理論—19-20世紀転換期におけるブダペスト思想界の一断面—」、「スラヴ研究」47号、2000年、368-384。
- 12 例えばL. Nagy, Zsuzsa, *The Liberal Opposition in Hungary, 1919-1945*, Budapest, Akadémiai Kiadó, 1983; Congdon, Lee, *Exile and Social Thought: Hungarian Intellectuals in Germany and Austria, 1919-1933*, Princeton, Princeton UP, 1991; Id., *Seeing Red: Hungarian Intellectuals in Exile and the Challenge of Communism*, DeKalb, Northern Illinois UP, 2001など。
- 13 Jászi, Oszkár, „A magyar emigráció feladatairól,” *Bécsi Magyar Ujság* (『ウィーン・ハンガリー新聞』—以下*BMU*)、1921 jún. 19, 1./ *Jászi Oszkár publicisztikája* (『ヤーシ・オスカール著作集』) (Válogatta, szerkesztette és a jegyzeteket készítette Litván, György, és Varga, F. János, Budapest, Magvető, 1982—以下*JOP*)、374。
- 14 Mazsu, János, *The Social History of the Hungarian Intelligentsia, 1815-1914*, Boulder and New York, Columbia UP, 1997, 87.
- 15 Romsics, *Hungary in the Twentieth Century*, 58.
- 16 ルカーチ・ジェルジなど学生や若手知識人を中心に1908年に結成された急進的な団体。
- 17 Jászi, Oszkár, „A nemzetiségi kérdés és Magyarország jövője,” *JOP*, 175.
- 18 以上Jászi, Oszkár, *A nemzeti államok kialakulása és a nemzetiségi kérdés*, Budapest, Grill Károly, 1912, 497.
- 19 *Ibid.*, 509.
- 20 Jászi, „A nemzetiségi kérdés és Magyarország jövője,” 168-169.
- 21 Romsics, *Hungary in the Twentieth Century*, 44.
- 22 *Ibid.*, 47.
- 23 *Ibid.*, 63.
- 24 Jászi, *A nemzeti államok kialakulása és a nemzetiségi kérdés*, 532-533.
- 25 Jászi, Oscar, *Revolution and Counter-revolution in Hungary*, London, P.S. King, 1924, 2.
- 26 マジャル人によるハンガリー(クロアチア・スラヴォニアを除く)、ドイツ人によるオーストリア、チェコ人によるボヘミア、ポーランド人によるポーランド、セルビア・クロアチア人によるイリリア(クロアチア・スラヴォニア・ダルマチア) Cf. Jászi, Oszkár, *A Monarchia jövője: a dualizmus bukása és A Dunai Egyesült Államok*, Budapest, Új Magyarország Rt., 1918, 37-39.
- 27 Jászi, *A Monarchia jövője*, 75.
- 28 *Ibid.*, 76-77.
- 29 *Ibid.*, 59-71.
- 30 概要は „Az aradi tárgyalások: Arad, november 14.,” *Világ* (『世界』), 1918, nov. 15, 3.
- 31 ハンガリー王国内に居住していた東スラヴ系の言語を話す人々。当時その帰属をめぐって主にチェコスロヴァキア、ハンガリー、ウクライナが争った。
- 32 羽場『ハンガリー革命史研究』、274-275。
- 33 Romsics, *Hungary in the Twentieth Century*, 99.
- 34 羽場『ハンガリー革命史研究』、351。
- 35 Litván, György (Sajtó alá rendezte), *Jászi Oszkár naplója 1919-1923* (『ヤーシ・オスカールの日記 1919-1923年』—以下*naplója*)、Budapest, MTA Történettudományi Intézet, 2001, 51.
- 36 *Ibid.*, 52.

- 37 Litván György (szerk.), *Károlyi Mihály levelezése I. 1905-1920* (『カーロイ・ミハイ往復書簡 第1巻 1905-1920年』—以下 *levelezése*), Budapest, Akadémiai Kiadó, 1978, 491.
- 38 以下、同綱領の内容は *levelezése*, 745-746.
- 39 1919年8月1日にタナーチ政権が退陣して社会民主党右派政権が成立したが、6日にフリードリヒ・イシュトヴァーンがクーデタにより政権を奪取した。しかし同政権はハプスブルク家のヨーゼフ大公から指名を受け、協商国からは未承認だった。
- 40 Romsics, *Hungary in the Twentieth Century*, 111-112.
- 41 この会合の内容はヤーシの1920年3月31日付の日記にまとめられている。Cf. *naplója*, 97-98.
- 42 タナーチ革命崩壊後の亡命共産主義者は、モスクワでタナーチ共和国の再建を企図したクン・ベアラと、その可能性は限定的だと考えるランドレル・イエネーらウィーンに残った者との間で、革命評価と今後の活動方針をめぐって対立が生じた。Cf. Congdon, *Exile and Social Thought*, 49.
- 43 *naplója*, 104.
クンフィラ旧社会民主党中央派とガラミラ旧社会民主党右派は1920-21年の一時期は週刊紙『明瞭』で連携したが、社会主義者として共通行動を取ったとは言い難い。ガラミラは1921年2月から1923年5月にかけて日刊紙『未来』を発行する。
クンフィラは『社会主義政党国際協同体』(通称「ウィーン協同体」、コミンテルンからは「第二半インターナショナル」と蔑称)にも参加している。Cf. 西川正雄『社会主義インターナショナルの群像 1914-1923』、岩波書店、2007年、135-139。
- 44 Jászi, Oszkár, „Károlyi Mihályhoz (カーロイ・ミハイへ),” *Wien*, 1920. V. 5, *Jászi Oszkár válogatott levelei* (『ヤーシ・オスカル書簡選集』)(Összeállította, jegyzetekkel ellátta Litván, György, és Varga, F. János, Budapest, Magvető, 1991—以下 *levelei*), 242-246.; *naplója*, 109.
カーロイは6月半ばにヤーシから亡命者の活動へのハンガリー国内からの協力者が現れたことを知らされた際も、市民に対して労働者と農民が多数派となることを求めた。Cf. „Károlyi Mihály Jászi Oszkárhoz (カーロイ・ミハイがヤーシ・オスカルへ),” *Podébrady*, 1920. június 21., *levelezése*, 635.
- 45 *naplója*, 119.
- 46 *Ibid.*, 127.
既に5月5日付のカーロイ宛の手紙で、ヤーシは亡命者の組織化を成功させるまでの計画のひとつに同紙の組織化を挙げている。Cf. Jászi, Oszkár, „Károlyi Mihályhoz,” *Wien*, 1920. V. 5, *levelei*, 245.
- 47 *naplója*, 158.
- 48 *Ibid.*, 135.
- 49 *Ibid.*, 141.
- 50 *Ibid.*, 155.
- 51 Jászi, Oszkár, „A magyar demokrácia szövetségei (ハンガリーの民主主義の同盟),” *BMU*, 1920 dec. 15, 1.; *Id.*, „A magyar nemzeti kisebbség helyzete Romániában (ルーマニアにおけるマジダル人民族的少数派の立場),” *BMU*, 1920 dec. 17, 1-2.; *Id.*, „A romániai magyar kisebbség jövő lehetőségeiről (ルーマニアのマジダル人少数派の未来の可能性について),” *BMU*, 1920 dec. 19, 1-2.
- 52 Jászi, „A magyar demokrácia szövetségei,” 1.
- 53 Jászi, „A romániai magyar kisebbség jövő lehetőségeiről,” 1.
- 54 *Ibid.*, 1.
- 55 *Ibid.*, 2.
- 56 例えば実際の発行部数は不明確で、Markovics, György, „A Bécsi Magyar Újság 1919. október-1923. december (ウィーン・ハンガリー新聞 1919年10月—1923年12月),” *Magyar könyvszemle* (『ハンガリー書籍評論』), 93. evf. 3.sz., 1977, 267.によれば、1921年夏当時の自称発行部数は3万5000部、うち3万部が周辺国で予約購読、ウィーンで3000部、ハンガリーへの密輸入が2000部。実際にハンガリーに持ち込まれたのは政府の監視用のみだという指摘もある。Cf. Litván, *Jászi Oszkár*, 206. old. / p. 228.
- 57 Markovics, „A Bécsi Magyar Újság,” 257.

- 1920年2月16日付のヤーシの日記によれば、社会民主主義者で革命期には大臣報道官を務めたオルモシュ・エデが同紙を反体制的な路線で引き継いだ。Cf. *naplója*, 89.
- 58 Göndör, Ferenc, „Horthyék megvásárolták a Bécsi Magyar Ujság-ot! (ホルティ派が『ウィーン・ハンガリー新聞』を買った!)” *Az Ember*, 1920. júl. 18., 9-10.; Id., „A Bécsi Magyar Ujság megvásárlásának – Ki az a Braun Márkus és ki az a Jolesch? (『ウィーン・ハンガリー新聞』の買収に一ブラウン・マルクシュなる者は誰か、そしてヨレシュなる者は誰か?)” *Az Ember*, 1920. júl. 25., 7-11.
- 59 *naplója*, 161.
- 60 以下、本段落は Jászi, Oszkár, „Károlyi Mihályhoz,” Wien, 1920. XII. 14, *levelei*, 251.
- 61 ヤーシは詳細に触れなかったが、スロヴァキアでのマジャル系社会主義者の活動が、同地を再びハンガリーの影響下に置こうとする領土修正主義、あるいはポリシェヴィキの影響力の拡大を想起させたためであろう。例えば、1920年8月11日付『ウィーン・ハンガリー新聞』は、スロヴァキアにおいて「ホルティ政権の者たち Horthy Miklós kormánya emberek」がポリシェヴィキの扇動活動を行い、国家財政から彼らに支払われていることを伝えた。Cf. „Horthy-bolszevikok agitációja Szlovenszkóban (スロヴァキアにおけるホルティ・ポリシェヴィキの扇動),” *BMU*, 1920. aug. 11., 5.
- 共産主義者とハンガリーの反革命体制との関係は今後更に検討を重ねる必要があるが、タナーチ革命に至った背景に歴史的領土の維持があることから、国境を越えたマジャル人の活動という形で何らかの親和性を有した可能性は否定できない。
- 62 カーロイがダルマチアに逃れるまでの経緯は、„Jászi Oszkár elmondja—Károlyi Mihály Olaszországból való kiutasításának és jugoszláviai menedékjogának hiteles történetét (ヤーシ・オスカルルが語った—カーロイ・ミハイのイタリアからの出国とユーゴスラヴィアの保護の真の話),” *BMU*, 1921. ápr. 17., 5-6.
- 63 以下、会談の様子とそれに対するヤーシの見解は *naplója*, 227-228.
- 64 *Ibid.*, 228.
- 65 *Ibid.*, 196.
- 66 リトヴァーンは、前出の発禁処分後に日急進党の亡命者が同紙を運営することで更なる発行が許可されたためだろうと推測する。Cf. Litván, *Jászi Oszkár*, 202. old./ p.224; 205. old./ p 227.
- 67 以下この段落は Jászi, Oszkár, „Károlyi Mihályhoz,” Wien, 1921. VI. 19, *levelei*, 261-265.
- 68 但し共産主義は除くと考えられる。
- 69 Jászi, Oszkár, „A magyar emigráció feladatairól,” *BMU*, 1921 jún. 19, 1./ *JOP*, 371-378.
- 70 *Ibid.*, 1./ 375.
- 71 Jászi, Oszkár, „Az emigráció „hazaárulása,” ” *BMU*, 1921 jún. 26, 1./ *JOP*, 379-383.
- 72 以上 *Ibid.*, 1./ 383.
- 73 Jászi, Oszkár, „A dunai szövetség jövője,” *BMU*, 1921. dec. 25, 1-2. 同記事内では複数の呼称が用いられているが、本稿では引用を除いて「ドナウ文化同盟」で統一する。
- 74 ハンガリー・チェコスロヴァキア・ルーマニア・ユーゴスラヴィア・オーストリアといったハンガリーの歴史的領土を含む地域を指すと考えられる。
- 75 具体的には「社会は理念や理想なく存在する」「個人の自由・自立・主権の理念は消滅している」など。Cf. Jászi, „A dunai szövetség jövője,” 1.
- 76 以上 *Ibid.*, 1.
- 77 以上 *Ibid.*, 1.
- 78 以上 *Ibid.*, 1.
- 79 以上 *Ibid.*, 1-2.
- 80 以上 *Ibid.*, 2.
- 81 以上 *Ibid.*, 2.
- 82 例えばコロジュヴァール(クルジュ)の『新聞』は、ヤーシがハンガリーの排外的民族主義に警告する一方で継承国の民族政策に気弱な対応を取っていると批判した。同記事はカッシヤ(コシツェ)の『カッシヤ日報』にも転載された。Cf. Litván, *Jászi Oszkár*, 214. old./ p.235; Jászi, Oszkár, „Nemzetiségi és konföderációs politika: Jászi Oszkár állítólagos levélváltása (少数民族と連邦国家の政策: ヤーシ・

- オスカーの自称する書簡交換),” *BMU*, 1922. feb. 7, 3. : *naplója*, 257-258.
- 83 *Ibid.*, 1.
- 84 Jászi, „A dunai szövetség jövője,” 1.
- 85 Jászi, „A nemzetiségi kérdés és Magyarország jövője,” *JOP*, 172.
- 86 *Ibid.*, 163-164.
- 87 例えば、既に1905年8月に彼は普通秘密選挙同盟を結成している。Cf. Litván, *Jászi Oszkár*, 54. old./ p.44.
- 88 Jászi, „A nemzetiségi kérdés és Magyarország jövője,” 168-169.
- 89 Jászi, „A magyar emigráció feladatairól,” *BMU*, 1921 jún. 19, 1./ 374.
- 90 Jászi, Oscar, “The Crisis of European Democracy,” 1924, in *Homage to Danubia* (Jászi, Oscar, edited by Litván, György, Lanham, Maryland, and London, Rowman & Littlefield, 1995—以下 *HD*), 46.
- 91 *naplója*, 263-264.
- 92 *Ibid.*, 264.
- 93 *Ibid.*, 354.
- 94 Litván, *Jászi Oszkár*, 226. old./ p. 245.
- 95 Jászi, Oszkár, „Horthy,” *BMU*, 1923. márc. 2, 2.
- 96 *naplója*, 367-370. ルーマニア・ハンガリー両国政府は彼の政治的影響力がないと判断していた。Cf. Litván, *Jászi Oszkár*, 232-233. old./ p.253.
- 97 *naplója*, 372-375.
- 98 *Ibid.*, 383.
- 99 Litván, *Jászi Oszkár*, 244. old./ p. 268. ; Jászi, Oszkár, „Károlyi Mihályhoz,” New York, 1923. XII. 11, *levelei*, 283.
- 100 Jászi, Oszkár, „Az októberi évfordulóra (十月の記念日に),” *BMU*, 1922. okt. 29, 1.
- 101 Jászi, Oscar, “The Crisis of European Democracy,” 1924, in *HD*, 45.
- 102 *Ibid.*, 45.
- 103 *Ibid.*, 38.

Oscar Jászi's 'Danubian Cultural Alliance' Plan and Reorganization of Central Europe at the Beginning of the 1920s

Noriko Tsujikawa

Oscar Jászi (Jászi Oszkár) was a leading figure of the progressive intellectuals, among whom there were some socialists in Budapest at the turn of the 20th century. The progressive or socialist intellectuals participated in the republican revolution of October 1918 and/or the communist revolution of March 1919, and then fled Hungary in the fear of the counter-revolution after the communist regime collapsed. Jászi became their virtual leader and tried to overthrow the counter-revolutionary Horthy regime.

However, the Hungarian exiles became isolated in 1921. Moreover, the anti-Horthy activities of Jászi and his colleagues did not sufficiently influence the domestic politics in Hungary, where the traditional political force regained the leading position in the establishment. The political force consisted mainly of noble families, based on the excessive land ownership, which was, according to Jászi, the basis of 'feudalism.'

He also warned a military threat based on nationalism increasing in the Danubian area. In October of 1921, the last Hungarian King returned to Hungary and attempted to lead the coup with paramilitary groups of radical nationalists. The neighbouring countries, Czechoslovakia, Romania and Yugoslavia, objected strongly, menacing Hungary with their militant threat. After the coup attempt was settled, Jászi met with the leading figure of Czechoslovakia. All of them accepted the military pressure on Hungary.

With the situation going from bad to worse, Jászi reinforced his political activities. The watershed was the editorial meeting of *Hungarian Newspaper of Vienna* on June 15th 1921. From then on he took charge of the management of the newspaper. According to one of his letters, Jászi expected the newspaper to grow up to be a reformist organization of the exiled intellectuals based on non-Marxist socialism, adequately influencing the ethnic Magyars living outside the borderline of Hungary. His many articles showed his belief that the political and economic 'democratization' of Hungary would defeat 'feudalism' and the Horthy counter-revolutionary regime and would prevent Hungary from asserting revisionism and conflicting with the neighbouring countries. He also insisted that the ethnic Magyars detached from Hungary after the war (WWI) should accept 'democracy,' be never misled by revisionism, and never conflict with the government of the country they were living in. Jászi identified themselves as 'Octobrists,' the main driving force for realizing these conditions.

On December 25th 1921, Jászi wrote an article in *The Hungarian Newspaper of Vienna*, 'The Future of the Danubian Confederation,' in which he propounded 'the Danubian Cultural Alliance.' In this article, Jászi defined 'culture' not only as what is unique to each nation, for instance language. He asserted that cultures of different nations had something in common. The commonality was 'democracy.' He discussed 'democracy' as one of the 'universal rights'

which were based on reason, and lay at the foundation of Western modern civil society. He critically regarded soldiers, capitalists and civil servants as a group pursuing their own profits, and set them strongly against the people, who would be a driving force for social reformation if appropriately conducted. He attempted to establish an enlightening network to the Danubian peoples based on 'democracy' beyond borders of states. He counter-posed the activities of the Cultural Alliance against nationalism of Hungary and the neighbouring countries. Because he admitted that the political and economic problems were actually hard to solve, he seemed to have accepted the political framework in Central Europe after WWI. He also expressed his own political uniqueness (the distinction between Horthy regime and theirs.) His endeavour to restructure and reunite this region 'democratically' as a leader of the peoples remained even after his exile.

However, Jászi's concept of the 'Danubian Cultural Alliance' did not have influence on the real politics. Because he did not demand the revision of the border demarcated after the war, strong objection from the ethnic Magyars living outside Hungary was inevitable. Furthermore, the neighbouring countries associated his idea with the revisionism of Hungary, because Jászi virtually assumed the historical territory of Hungary as the area of activities of the Cultural Alliance and emphasized that the ethnic Magyars outside the border of Hungary were a key element of their regional cooperation. Therefore, his proposal was supported by neither the ethnic Magyars outside Hungary nor the neighbouring countries. Besides, the international situations increasingly worsened for 'Octobrists', and finally failed his attempt to organize an international anti-Horthy network.